2017年1月26日 京都新聞掲載

網膜硝子体疾患

洛和会音羽病院

アイセンター所長
栗山　晶治 氏

網膜断層撮影で早期に発見も

Q 網膜硝子体疾患とは。

A 網膜は眼球の一番奥にあります。カメラで例えるとフィルムに当たり、網膜疾患はそれが傷んでしまう病気です。硝子体は眼球の中に詰まっている透明なゼリー状の組織で、加齢などが原因で変化し病気につながります。網膜の上に硝子体がくっついている構造なので密接に関係しており、一般的に網膜硝子体疾患として考えることが多いです。

Q 原因は。

A 原因の多くは加齢で、加えて高血圧や糖尿病を併発しているとリスクが高くなります。硝子体は、60代前後になると加齢により組織が溶けてきて、虫が飛んでいるように見える飛蚊症が多く見られますが、ひどくなると網膜剥離などの病気に進行します。最近は網膜の中心部分が傷んで中心がゆがんで見える加齢黄斑変性症なども増えてきています。また、網膜の血管が閉塞する病気では、閉塞が強くなると網膜の血流が悪くなって緑内障になり、失明する可能性もあります。

Q 治療法と検査について。

A 糖尿病網膜症や初期の網膜剥離にはレーザー治療を行います。加齢黄斑変性や網膜の血管が閉塞する病気に対しては、VEGF（血管内皮細胞増殖因子）を抑える、抗VEGF剤の硝子体注射が効果的です。ただし高額で平均して3～4回、多い方だと10回ほど打たなければなりません。検査は一般的に視力検査、眼圧を測る、視野検査です。最近ではOCT（網膜断層撮影）が網膜疾患の検査として有効だとされ、加齢黄斑変性などは自覚症状がない状態でも発見できるようになりました。早期発見で進行を抑えることが大切です。あらゆる疾患に通じますが、予防としては高血圧、糖尿病、脂質異常症に気を付けて、できれば禁煙してください。